

Early and late outcome including postoperative recovery of patients aged 80 years and older undergoing aortic valve replacement for aortic stenosis

メタデータ	言語: English 出版者: 公開日: 2018-03-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 町田, 洋一郎 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://jair.repo.nii.ac.jp/records/2002166">https://jair.repo.nii.ac.jp/records/2002166</a>

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 甲第 1971 号

Early and late outcome including postoperative recovery of patients aged 80 years and older undergoing aortic valve replacement for aortic stenosis

(大動脈弁狭窄症に対して大動脈弁置換術を施行された 80 歳以上の患者の術後回復を含む術後早期、遠隔期予後)

町田 洋一郎 (まちだ よういちろう)

博士 (医学)

#### 論文審査結果の要旨

80歳台の大動脈弁狭窄症(Aortic valve stenosis: AS)の罹患率は9.8%と言われ、より一般的な疾患となっている。高リスク患者に対する大動脈弁置換術(Aortic valve replacement: AVR)、経カテーテル大動脈弁置換術(transcatheter aortic valve implantation: TAVI)の無作為試験では5年生存率は同等であり、特に80歳以上高リスク症例に関しては術式の選択は各施設のハートチームの判断となっている。そこで本研究はASに対してAVRを施行された(冠動脈バイパス術を含む)80歳以上の患者を他の年齢群と比較し、早期、遠隔期の成績を検討した。

2002年9月から2016年12月までに当院で施行されたAVR 539例を対象とし、そのうち203例が冠動脈バイパス術(coronary artery bypass grafting : CABG)も施行した。これらの患者を60歳以下(58例)、60-69歳(130例)、70-79歳(279例)、80歳以上(126例)の4群に分け、早期死亡率、術後合併症を検討した。

早期死亡率、術後合併症に関してはどの群もほぼ同様であり、80歳以上群で早期の死亡、合併症率は独立予後因子とならなかった。早期死亡率は80歳以上群で3.1%、その他群は0-3.5%であった。高齢群で独立因子となったのは入院期間( $p=0.002$ )、非自宅退院( $p=0.001$ )であった。若年群と比較して高齢群はAVR後からの回復に時間を要すると考えられた。年齢が上がると遠隔期死亡率( $p=0.002$ )が独立予後因子となったが、80歳以上の超高齢者に関しては5年生存率が78%と良好な結果を得た。

本研究で80歳以上群の早期死亡率は3.1%と、若年群と遜色なく、術後合併症に関しても同様である。入院期間、非自宅退院に関しては80歳以上群で有意差が生じた。80歳以上の高齢者のAVRは若年群と同等の良好な早期死亡率、合併症率であり、さらに術後遠隔期生存率も良好であった。80歳以上の高齢者であってもAVRの可能性を考慮すべきであり、年齢のみでAVRを非適応とすべきではないと考える。

よって本論文は博士(医学)の学位を授与するに値するものと判定した。